

フッサール『事物と空間』における空間構成について

三 村 尚 彦

はじめに

フッサール全集（フツセリアーナ）第十六巻『事物と空間、一九〇七年講義』（以下、『事物と空間』と略記）は、一九〇〇年『論理学研究』出版の際に現象学を記述的心理学と性格づけていたことをフッサールが反省し、現象学を超越論的哲学へと展開させていく時期にあたる一九〇七年に、彼がゲッティゲン大学で行った講義草稿からなっているテキストである。『論理学研究』と中期の主著一九一三年出版の『イデーンⅠ』とのちょうど中間の年になされた講義というだけでなく、このテキストはフッサール研究全体の射程から見ても、特記すべき多くの内容をもっている^①。しかしながら、『事物と空間』においてフッサールが展開している思想に関しては、これまで詳細に論じられることがきわめて少なかった。ベルネは、このテキストを参照しながら、事物構成と空間構成の段階性に関して考察した際、次のように述べている。「われわれは、フッサールが没頭したこのような現象のきわめて入念な分析の内容をここでは再現することはできない^②」。通常こうした言い方は、紙幅の制約や考察の流れから詳細な議論をあえて断念

する場合になされるのが普通である。しかし『事物と空間』にあつては、フッサールの論述があまりに細かい現象分析に立ち入っていて問題の全体像を見失いかねない（あるいはフッサール自身の意図が計りかねるとも言える）という配慮から生じていると思われる。それゆえ、フッサールが行った現象記述に沿った形で、空間構成の議論がなされることは非常に稀なのである。「時間に関する現象学」においては、質、量ともにきわめて充実した先行研究が存在するのに対して、「空間の現象学」は、依然未開拓の部分をも有していると言えるだろう。

さて本論考では、フッサールが行っているきわめて詳細な現象分析の一部分を紹介し、それに解説を加えながら、空間性の構成が、『事物と空間』の段階では不完全なものにとどまらざるをえなかった、と考えられる根拠を示すことを目標としたい。なお今回は、眼球運動的領野 *okulomotorisches Feld* の構成、伸縮 *Dehnung* および転回 *Wendung* による奥行き構成に、論述を限定したい。⁽³⁾ 議論の流れは、以下の通りである。まず、『事物と空間』というテキストの成立、および「空間性はいかに構成されるのか」というフッサールの問いの意図について論じる。次に、事物の空間性が構成されるという事態に関するフッサールの具体的な分析を、特にキネステーズ概念に注目しながら示していく（第二章、能力意識としてのキネステーズの相関者である空間）。そして最後に（第三章、多様体論としての空間構成論）、『事物と空間』のいくつかの節の論述を追いながら、フッサールの空間構成論が『事物と空間』段階では不完全なものにとどまっていると主張せざるをえないこと、またそれはどういった意味でなのかを示して、本論考の結論を導き出す。

第一章 『事物と空間』における議論の射程

まずは『事物と空間』というテキストの成立過程を確認していこう。

数概念の基礎づけを心的作用を反省することによってなし得ると主張する心理学主義 *Psychologismus* を批判し、数や論理形式など理念的対象の客観的存在と、それを捉える意識作用の相関関係を考察しながら、「純粹論理学の基本概念や理念的諸法則がそこから発現してくるところの源泉を解明する」(XIX/1, 7) のが、『論理学研究』においてフッサールが構想していた現象学であった。客観的な論理学を基礎づけるといふ課題は、その後、認識、認識意味、認識対象についての相関関係の *ア・プリアリ* を、すなわち認識体験一般を探究することへと拡張されていく。それに伴い、現象学も認識妥当性の究極的意味を解明する超越論的現象学へと移行していくのである。超越論的現象学のプログラムの提示という性格を有する『イデーニ』は、現象学的方法の導入とそれによって開かれる新しい学としての現象学の意義を論じている。われわれは通常、対象や世界の存在を暗黙のうちに前提とし、さまざまな営みを行っている。こうした態度をフッサールは自然的態度 *natürliche Einstellung* と呼ぶ。自然的態度のうちで行われる諸学問は、世界の存在措定を無条件に前提しているため、先に述べた「認識妥当性の究極的意味を解明する」という要求に応えることができない。そこでフッサールは、世界の存在を措定する働き、一般定立 *Generalthesis* を遮断し、あらゆるものごとの存在と意味が、そこにおいてはじめて現れてくる純粹な領域、超越論的意識の領域を獲得する現象学的還元という方法を遂行する。こうしてわれわれが日常的に体験しているものごとは、それ自体として存在し、それぞれの意味を有するものではなく、超越論的意識によって多様な経験を通じて統一的にそうしたものとして形成されたもの、フッサールの言い方では「構成されたもの」として、捉えなおされるのである。現象学が相関関係の *ア・プリアリ* を解明するといふことは、意識による対象構成の本質を明らかにすることを意味するのである。

このような超越論的現象学へと移行していく時期のまっただ中と言ってもよい一九〇七年夏学期、フッサールはゲッチンゲン大学で「現象学と理性批判のための主要部分 *Hauptstück*」というタイトルの講義を行った。後にフッサ

ールが繰り返し「事物講義」Dingvorlesungと呼ぶことになるこの講義の草稿（草稿番号E1という記号で分類されている草稿群）が、『事物と空間』の主要テキストである。この講義の序章に当たる『現象学の理念』においては、現象学的還元という方法が初めて明確に語られたのである。⁽⁴⁾それゆえ、『事物と空間』において、最初の具体的な現象学的構成分析が展開されていると言ふことができるであろう。特にこの講義で取り組まれているのは、空間内に存在する事物（的存在者）はどのように構成されるのかという問題である。すなわち、われわれがコップやペンといった事物が目の前に存在しているという信念をもつには、意識の経験によってコップがまさにコップという空間的事物として捉えられなければならない。こうした経験のプロセスを通じてコップという認識対象の統一がどのように成立してくるのかを問う、ということである。さらにそれと密接に関連するものとして、空間の構成が同時に問われてくる。事物は、二次元の平面図形ではなく空間内に存在するものである限り、手前や奥に共存しているさまざまな他の事物との空間的な位置関係を必然的に伴っているからである。序説と結論部分を除いて、六つの編から成っている『事物と空間』では、次のような進行で空間事物の構成が論じられている。空間内の外的事物についての意識体験として、フッサールが範例的に取り上げるのは、知覚、特に視覚と触覚である。まず第一編では、知覚に対する考察を行っていくにあたって必要な基礎的規定と性格づけを提示している。次に第二編においては、「変化せずに静止している事物が与えられている」というケースを出発点として、知覚および知覚によって与えられるものについての分析を行う。第三編では、与えられているものは不動で（動いておらず）、知覚者が動いている場合と、知覚者は静止し知覚されたものが動いている場合を考察し、「領野」Fieldという概念を導入する。これは、まだ空間における平面のことではなく、前経験的な präempirisch 延長を意味する。第四編において、フッサールは空間構成の問題へ移っていく。さらにフッサールは、運動的な知覚系列においてのみ空間物体が提示されるとする。運動的な知覚系列、別の言い方を

すればキネステーゼ的経過系列において、どのように空間物体が構成されるのかを具体的に考察するのが、第五編である。そこでは、眼球運動による像変化から三次元の空間構成へと議論が進行していく。最後に、これまでは事物の静止および運動が考察されてきたが、第六編において、色などの性質が変化するなかで、純粹空間が構成されることが論じられている。

以上のように確認される『事物と空間』というテキストにあつて、本論考に関係する二つの大きなポイントをあらかじめ取り出しておくことにしよう。

一つ目は、フッサールがここで問題としている事物は、そもそも事物の抽象的な層 *Schicht* であるという点である。フッサールは事物を三つの層に区分している (III, 347f.)。時間的なもの *res temporalis*、延長するもの *res extensa*、物質的なもの *res materialis* の三つである。事物は時間のなかで持続する存在者であり、事物の「時間持続する」という性格に関する考察は『内的時間意識の現象学』においてなされている。また物質的なものとは、因果性の統一として捉えられる事物のことである。事物は状況に応じてさまざまな振り舞いや状態を示し、それによって当の事物はどのような素材でできているのか、どのような性質を有したもののかを告知してくる *bekunden*。こうした因果性統一としての事物の構成を問題にしたのは、『イデーンII』である。そして延長するもの *res extensa* としての事物構成を扱っているのが、『事物と空間』なのである。延長するものとしての事物については、『イデーンI』の記述が明瞭である。「事物は、その理念にしたがえば、延長するものである。それは例えば、空間という観点で言うと、無限に多様な形態変動することが可能なものであり、形態および形態変化が同一的に保持されている時でも、その位置が無限に多様に変化しうるものである」 (III, 348)。本来的な意味で事物が構成されるという事態は、ここで挙げた構成的層が三つともそろふことが必要ということになる。したがって『事物と空間』においては、事物の一つの層で

ある「延長するもの」という側面が抽象的に取り出されて、論じられているのである。このことは『事物と空間』の編者であるクレスゲスも強調している。「事物講義の分析は、延長するものの構成理論にとって必然的な方法的抽象を一貫して保持し続けている」(XVI, Einleitung des Herausgebers, XIX)。しかしながらこのことは、単に三層からなる事物の一つの層を取り出して論じているということ以上の意味をもっている。物質性と時間性を捨象して事物を捉え、その位置変化や形態変化に注目しながら、そこで示される本質連関を把握しようとする学と言えば、われわれは幾何学のことを思い浮かべるであろう。そしてフッサールが空間事物構成という問題に取り組む動機の一つが、幾何学および幾何学空間の基礎づけということだったのである。すなわちそれは、自己批判によって心理学主義という立場を放棄するに至る以前から、フッサールによって意図されていた数学や論理学の基礎づけという試みと一致するのである。ここでわれわれは、フッサールが事物の構成問題として「延長するもの」という抽象的な一つの層を取り上げるとき、空間事物の構成問題と幾何学空間の基礎づけ問題が重なり合っているということを確認する。これを本論考の一つ目のポイントとする。

二つ目は、第四編以降で分析の中心となっているキネステーズ概念の導入である。フッサールは空間表象をめぐる議論において、当時の連合心理学者ベインが論じた筋肉感覚の理論から多くの影響を受けている。われわれがものを見たり、触れたりする際、そこに一定の拡がりや色、色の拡がりやすさといった一定の感觸の拡がりを感じ取っている。それゆえ一般に、空間はそうした色感覚や触覚に根ざしているものだと考えられていた。しかし、ベインは空間が成立するには色感覚や触覚にさらにもう一つの感覚が付け加わらなければならないと主張する。それは筋肉感覚である。空間的な形や運動を経験するためには、それに対応する筋肉運動の感覚がなければならないということである。こうした筋肉感覚、運動感覚にもとづいて空間表象を説明しようとする議論は、身体の生理学的・解剖

学的な知見に基づいていることは言うまでもない。なぜなら色感覚と筋肉感覚との結合は、筋肉装置を伴った感覚神経がそうした結合を可能にするようになっていて、といった仮説にもとづいているからである。⁽⁶⁾ 認識妥当性の究極的意味を解明するために現象学的還元を行うフツサールにあつては、身体の生理学的事実をあらかじめ前提することはできない。したがって、筋肉感覚、運動感覚も生理学的な存在としての人間の特定箇所⁽⁷⁾の筋肉の収縮に伴って感じられる感覚とすることは許されず、主観に与えられる純粋な現象ということになる。そこでフツサールは、身体という事物の運動を感覚するという誤解を避けるために、「運動」を意味するギリシア語の「キネーシス」*Kinesis*と「感覚」を意味する「アイステーシス」*aisthesis*の合成語「キネステーゼ *Kinästhesis*」を用いて、現象学的な用法を際立たせようとしたのである (Vgl. XVI, 161)。

以上、本論考における二つのポイントを確認したので、次にフツサールが行った具体的な空間構成の議論を見ていくことにしよう。

第二章 能力意識としてのキネステーゼの相関者である空間

『事物と空間』では、まず空間事物についての意識体験として、知覚の現象学的分析が行われる。この考察が「現象学的」と呼ばれる限り、当然、現象学的還元が遂行されている。したがってわれわれが知覚を行う際に世界の存在信念から獲得しているさまざまな契機 *Moment* は括弧に入れられ、利用されることはない。こうした想定のもとで知覚において与えられているもの、それは現出 *Erscheinung* である。空間的な事物は、必ずある一定の視点から見られた特定の一面を介して現れ出る。例えば国会議事堂は、正面から見られた見え方（われわれがよく写真で目にする桜田門側からの見え方）と、裏手（議員会館、地下鉄永田町駅側）から見られた見え方とは異なっている。国会議

事堂のすべての側面が、完全に一挙に知覚にもたらされることはない。したがって、議事堂を眺めている場合、本来的に知覚されているのは、視界に与えられている議事堂の一面（正面玄関側の眺め）である。正面からは見ることでできない議事堂の側面は、呈示的な内容を欠いている。正面を見ているだけでは、国会議事堂の議員会館や国会図書館側の壁が塗装作業されていたとしても、知る由がないのである。だからといって、われわれは議事堂を見ることは不可能なのであり、知覚できるのは議事堂の一面だけだというわけではない。したがって外的事物の知覚には、本質的に二つの契機、「有体的に」leibhaftig「本原的に」originär与えられている本来の現出と、呈示的内容を欠いていて空虚にとも思念されているだけの非本来の現出が含まれていることになる。それら二つが協働することによって空間的対象の知覚が成立するのである。そうでないとすれば、議事堂の知覚と、演劇や映画の舞台に設置された議事堂のセットの知覚は、原理的に同じものとなってしまいうだろう。それゆえここで問題なのは、全体的統一的な空間事物の知覚を成り立たしめる本来の現出と非本来の現出の必然的な連関である。本来の現出においては、たしかに事物の一側面が直観的にそれ自体与えられている。それは紛れもなく目の前で知覚されている当の事物である。しかしこの本来の現出は事物全体ではなく、事物の一部分にすぎない。そこでフッサールは、こうした本来の現出という自体所与性をもつ部分性を、それを補完する自体所与性への要求であると把握して、そこから本来の現出を必然的に取りまいていくような、同じ対象のさまざまな、それ以上の可能な現出への地平的な指示という構造を導き出すことになる。『事物と空間』ではこうした地平的な指示構造を、未規定的規定という形で表現している。「私が一つの箱を統握するならば、その箱は統握に対して初めから背面と内部をもっている、しかしたいは未規定的である」(XVI, 108)。箱や家などを知覚する際、本来の現出にもたらされている面の色やデザインははっきり規定できるが、非本来的現出、つまり見えていない側面は未規定的にとどまっている。だがこの未規定性は絶対的な未規定性ではない。家

の裏側が実際どのような様子であるのかについてはわからなくとも、そのわからないという形での空虚な志向は、裏側が何らかの色やデザインをもつということ。「規定せずに予描している vorzeichnen」(XVI, 59)。つまり未規定性は未規定という性格を通じて規定しているのである。ある本来的現出が生じると、それには空虚な志向としての非本来的現出が複合化される。非本来的現出は未規定的規定という性格をもって本来的現出の地平を成す。したがって本来的現出自体、非本来的現出なしには存立しないのである。さらに現出の連続が先へと進むと、新しい面(事物の今まで知覚されていなかった面)が本来的現出へと至り、同時に先ほどまで非本来的であったものが規定を被る。以上のような本来的現出と非本来的現出のダイナミズムこそが、空間事物の知覚(外的知覚)の本質構造であり、空間性の構成を可能にするものである。

このダイナミズムを担うものとしてフッサールが導入したのが、キネステーズである。先に説明したように、二〇世紀初頭の生理学的知見にもとづいて主張された運動感覚、筋肉感覚を現象学的に捉えなおしたのが、キネステーズと呼ばれる独特の感覚である。本来的現出と非本来的現出とが連関するためには、統一的な事物が多様にさまざまに現出しなければならぬ。事物の多様な現出は、運動によってもたらされるものである。「一切の空間性は、運動のうちで、つまり客観そのものの運動もしくは『自我』の運動のうちで、その運動によって生じる方向の変化とともに、構成され、与えられる」(XVI, 154)。目の前の事物が動く、もしくは事物を見ている知覚者のわたしが動く。このことを通じて本来的現出にあたる事物の面が変化していくことによって、空間事物および空間性が構成されるのである。こうした運動と連動している感覚がキネステーズであるが、それは事物を呈示する感覚ではなく、「それ自身呈示することなしに、呈示を可能にする」(XVI, 161)ものである。例えば、赤という色感覚は、質料契機(青ではなく赤であるという契機)と延長的契機(赤が一定の拡がりをもってのこと)という二つの契機によって、目の前の赤色

の事物、例えば一個のトマトを呈示にもたらすことができる。しかし事物が存立するためには、呈示的感覚だけでは本来的現出と非本来的現出のダイナミズムが不可能であるがゆえに、呈示ということに可能にするキネステーズが必要だ、というわけである。したがってフツサルがキネステーズに帰したのは、ある一つの現出が本来的なものではあるが部分的であるがゆえにそれを補完する働き、言い換えれば、空虚な現出を地平的に指示するという働きである。このような働きのキネステーズ概念にはつきりと認められるようになるのは、一九一〇年代以降、フツサルが「わたしはできる」Ich kann という能力意識の考え方を主張するようになってからである。したがって次の章で詳しく論じるが、『事物と空間』の段階のキネステーズ概念では、空間構成は不完全になるのである。「自我は身体を自由に動かし、そのことを通じて外界を知覚するという能力（「わたしはできる」）を有している」(IV, 152)。国会議事堂の正門に立ち、この建物の裏側はどうなっているのだろうかと思ひ、裏手に回ってみる。こうした単純なことを意味しているように思える『イデーニ』からのこの引用は、身体という物体と国会議事堂との事実的な位置関係を語っているのではなく、「こうした自由に運動できるという身体のおかげで、主観はそのさまざまな現出の体系と、方向づけとを流れにもたらすことができる」(IV, 158)もしくは『わたしはできる』というキネステーズ的自由は、意志的な身体運動の可能性だけではなく、身体運動によって動機づけられた事物現出の産出にも関わっている」というように、現出を産出する働きについて言及しているのである。議論の明瞭さを優先して事実的な語り口(現象学)の枠を越えた超越的な言い方)を用いて表現してみよう。例えば事物をより見やすい位置で見ようと思ひ、顔を動かす。その際に感じられる運動感覚(キネステーズ)に連動して、事物の現出は刻一刻と変化していく。能力意識として解釈されたキネステーズは、こうした現出と感覚との間の連動を言い表しているだけでなく、特定の現出は、それ以外の可能な現出の系列のなかで実現された一つの現出であることを、つまり部分性という性格を有しているこ

とを示している。すなわち、わたしはいつでも自由に動くことができる。実際に動くならば、現在本来的なものとして与えられている現出は、異なるものへと変化する。しかしその現出もまた同一の事物を構成する形で連動していると統握される、ということである。いささか長くなるが、同じことを語っているフッサールの言葉を引用しておく。

「連続的な知覚においては、一つの事物が、直接的な現前という端的な存在確信のうちでわたしに対して存在している。わたしのキネステーズを働かせながら、ともに経過するさまざまな呈示を、ともに帰属しあうものとしてわたしが体験するとき、多様な仕方で自己を呈示するひとつの事物が顕在的に現前しているという意識が保持される。ここに属しているさまざまな事物呈示が変化していくキネステーズに対して何を含みもっているのかと問うならば、そこには隠された志向的連関（もし……ならば）である）が働いていることを、われわれは認めるだろう。

——中略—— 顕在的なキネステーズはキネステーズ的能力の体系のうちにあるが、この体系には一律調和的に帰属しあう可能的諸継起の体系が相関しているのである。そしてこれが現前している事物の端的な存在確信すべての志向的な背景なのである」（VI, 164）。

本章の記述をまとめてみよう。フッサールは空間性の構成は、客観および自我の運動によってもたらされると主張した。運動が現出の多様を可能にし、そのうち本来的現出と非本来的現出とがダイナミックな連関をすることによって空間事物および空間が捉えられる。こうした動態的な関係が可能になるのは、「わたしはできる」というキネステーズ的能力体系が事物現出を産出しているからである。こうしたフッサールの考え方は、おもに一九一〇年代以降、特に発生的現象学という構想が深まっていくことと平行して、成立していったものである。とすれば、一九〇七年の

講義である『事物と空間』の空間事物の構成論は、不十分なものであるということになるが、それはいったいどのような意味でなのか。

第三章 多様体論としての空間構成論

まずは、『事物と空間』において展開されている具体的な空間構成に関する議論を見ていくことにしよう。フツサーは空間構成を「眼球運動的領野」と三次元空間の二段階に分けて、論じている。これは領野と空間いずれの構成にとっても不可欠なキネステーズ的体系を、段階的構造として捉えたことに対応している。自我の運動が感覚器官や身体部分ごとに分節されて、それぞれがキネステーズ的体系とされ、さらにそれが複雑に組み合わされていくという理解である。まず眼球が運動して感じられる運動の連続体を眼球運動的体系とする⁽⁹⁾。そして次に、頭部運動の体系、最後は歩いて動き進む身体の体系というように段階を経ることで、空間対象が構成されるという考え方をフツサーは採用しているのである。

最も詳細に語られているのは、眼球運動的領野の構成である。フツサーは、空間対象が構成されることに先立った前経験的な次元で、われわれに与えられる感覚与件についての緻密な記述を展開している。視覚領野は、前経験的な質料（例えば赤という色感覚）とその拡がり（形、大きさ）によって充たされている。それは左―右、上―下という二つの座標軸における位置の体系であり、これをフツサーは二次元的多様体 *zweidimensionale Mannigfaltigkeit* と名づけている (XVI, 165)。一定の質料と輪郭をもった領野内の具体者 *Feldkonkretum* は像 *Bild* と呼ばれ、像の変化に注目することによって、像と眼球運動感覚（眼球キネステーズ）の相関関係が本質的なものとして取り出されてくる。像の現出だけに限定して考えるならば、視覚的領野が呈示しうるものだけで事物構成は可能であるように思

われるが、領野および像が静止していて眼だけが動いているケースと、逆に眼球が静止し領野が動いているケースを比較してみると、キネステーゼ的感覚が事物構成にとって本質的であることが確かめられる。二つのケースは、現象学的に見れば、視野に関して厳密に同じ変化が起こっている。しかしわれわれは視覚的に知覚された対象の運動と静止を容易に区別することができる。キネステーゼが変化していないにもかかわらず、視覚像が変化していれば対象が動いているのであり、キネステーゼ的経過と像の変動が連動すれば主観が動いている、とされるからである。

実際に視覚経過だけでは「静止と運動それぞれの」統握にとって不十分であること、また視覚経過は静止と運動を異なる現出へもたらす手段を自らのうちにはもっていないということを、上記のことからわれわれは洞察するのである。そしてこれによって語られているのは、客観的位置や客観的空間性の構成は本質的に、身体運動によって、現象学的に表現すれば、キネステーゼ的感覚、持続的なものであれ、経過変動するものであれ、キネステーゼ的経過によって媒介されているということである (XVI, 176)。

さらにフッサールは、キネステーゼ的感覚と像経過との相関関係を重要な現象学的事実として規定していく。キネステーゼ的な眼球感覚Kと像経過bの間には関数的(機能的) funktionell (XVI, 170) な関係が成立している。単純に客観的な語り方をすれば、静止した事物に対応する視覚像の場合眼球を右から左へ動かせば、それに応じて視覚像は左から右へ移動し、眼を元の位置に戻せば像は再び右から移動して元の位置で静止する。しかし両者は、内的に結合しているわけではない。「どんな感覚Kも各視覚像と折り合いがつく。——中略——それは同じ事物であれ他の事物であれ、統一的な現出へもたらすという目的のために同じKが別の像と結びつきうるということである。まさにこ

うした考察が教示しているのは、Kとbは恒常的な共存関係にはないということである」(XVI, 177)。眼球感覚Kと像経過bにおいては、傾向性によって結びつけられるような心理学的な事実ではなく、「むしろ問題となっているのはある種の共属性に関する現象学的事実」(XVI, 178)である。ここで留意すべきことは、現象学的事実としての共属性が認められるのは個別的な特定のKとbとの間ではなく、キネステーズ一般と体系としての場所の間にある。

場所多様体は絶対的に不変なものであり、たえず与えられているものなのである。また場所多様体はKなしには与えられず、またKもただ変動しながら充実される場所多様体全体なしには与えられない。その限りで確定した、しかも決して阻害されることのない連合をわれわれはもっていることになる。しかしながらこの連合は、あるKとある場所との間のものではなく、むしろ場所の拡がり全体と「K一般」の間に働く連合であるが、ここではたしかに特定のKのことではない。と言うのも、「K一般」が意味しているのは、なんらかのKあるいはなんらかのKの連続的経過は場所多様体と経験的に一つになる、ということだからである(XVI, 179f)。

われわれはここに、『事物と空間』におけるキネステーズ概念の特徴ないし限界を見て取ることができるであろう。というのも、視覚領野の変化における秩序を主導的に担っているのが、キネステーズではなく、キネステーズと連合している場所多様体として読みとれるからである。このことから帰結されるのは、『事物と空間』での空間は「わたしはできる」という能力体系の相関者ではなく、多様体という体系である、ということである。

フツサールは二次元という限界内での統一秩序として眼球運動領野を記述した後、次に頭部の運動、胴体(上半身)

の運動を考慮に入れることで領野を拡張していく。「頭部は卓越したキネステーズ的基本位置を占め、そのまわりに二次元的なキネステーズ的運動面が広がる。その際、リーマン的視覚空間が構成されるであろう」(XVII, 315)。これは眼球運動の構成段階から、頭部の運動が導入されたときに構成される領野についてのフツサールの記述である。第一章でポイントとしてすでに言及していたように、ここで事物構成における空間性が、幾何学空間と重なり合っていることは、明らかであろう。リーマン的視覚空間とは、非ユークリッド幾何学としてリーマン幾何学における空間に他ならないからである¹⁰⁾。

さて、以上のように領野を拡張していつても、これらの空間はいわば擬似的空間であり、なお奥行きが欠けているとフツサールは考える。奥行きが成立すること、言い換えれば、三次元空間が成立するには、前進すること *gehen*、歩行のキネステーズ的体系が必要であるとされる。フツサールは直線的に歩くことと、事物の回りを歩きまわることとを区別する。『事物と空間』のなかでこの二つをフツサールは、「伸縮」と「転回」という現象として詳細に記述している。

純粹な遠ざかりは、線の変様である。動機づける状況は、線的な仕方で無限に変化する。純粹な転回は、円環的 *zyklisch* 変様である。キネステーズ的状况は円環的に変化し、純粹な転回変様の体系において、転回する像系列をそれ自身のもとへ「元の像状態へ」連れ戻す。

単なる遠ざかり変様にあつては、像は（内的覆い隠しと露出を度外視すれば）単に収縮し、無限にゼロという限界まで収縮するのである。ゼロ限界に、キネステーズ的に無限性が対応している。逆の方向で言えば、像の無限の拡大化をわれわれはもつ。したがっていわばこの限界は「無限」であるが、一方、キネステーズ的にはこの限界に

は、有限な限界が対応する。現出している側面は同じである。いつも「前面」が現出している。客観が他の側面をもつということは、可能な転回変様によって共に構成されているおかげなのである。現出系列が円環的なものであり、円環的に側面ごとに移行していき、最終的に側面の完結性を、すなわち閉じた物体の表面を構成するのである。

(XVI, 249f.)

直線的な歩行は、対象に近づいたり、あるいは対象から遠のくことを可能にするが、それに連動して像は拡大、縮小を被る。こうした現出系列をフッサールは伸縮として記述し、それによって領野は無限に拡張されるとした。一方、転回とは、事物の回りを歩き回ることによってもたらされる現出系列である。これによって見えていた側面が他の側面に隠されるという現象が生じる。これはキネステーズの変様に動機づけられており、キネステーズ的経過を逆にたどると、すなわち逆向きに回ると、隠された面がふたたび現れる。隠されていた面は消え去ったのではなく、保持されているものとして把握され、現出系列は円環的に閉じたものとして構成される。すなわち、対象は見えている側面以外に見えていない面をもったものとして構成されるのである。そしてフッサールは「まとめ」と題されたごく短い七十三節において、次のように論じている。

キネステーズ的変様はどれも、眼球運動的であるか、もしくはその他のキネステーズ的体系に関係している。前者は単に眼球運動的領野を構成し、後者は、遠ざかりと転回としての伸縮の体系、ここにはすべての方位づけが含まれているが、そうした伸縮の体系を、眼球運動的領野へともたらず。このことを通じて二次元的な眼球運動的領野は、三次元の空間領野へと変化する。三次元の空間領野とは、一次元的な線的距離多様体と、二次元的に円環的な転

回多様体とが結合したものである。(XVI, 255) (傍点は引用者)。

つまり、二次元の眼球運動領野から移行して三次元の空間領野が成立するのは、主観が対象へと近づいたり対象から遠のいたりする直線的歩行による一次元的な線的多様体と、対象の回りを歩くことによる円環的多様体との結合によるということである。『事物と空間』での空間構成に関するこのような見解が、能力体系であるキネステーゼの相関者として空間を捉える議論と大きく隔たっていることは明らかであろう。線的多様体と円環的多様体との結合によって三次元空間がもたらされるという発想は、X軸Y軸にZ軸を加えることで一つ次元が増え、空間形象を扱えるとする代数幾何学的なものではないだろうか。フッサールが語ろうとしていたものは、われわれの直接的な経験によって成立してくる空間性、日常的な空間経験の成立であったはずである。⁽¹⁾第二章で述べたように、キネステーゼが能力意識として地平性を可能にし、その相関者として空間性を構成するものとなるのは、『イデーニII』での考察を待たなければならぬ。そこでの考察対象が、自然主義的態度 *naturalistische Einstellung* における人間と自然および、人格主義的態度 *personalistische Einstellung* における人格 *Person* と周囲世界 *Umwelt* であることは示唆的である。物質性の層における全き事物と、それが意味的価値的なものとして人格に出会われること、このような視点を確保してこそ、日常的な空間経験に迫ることが可能となるであろう。

最後に、『事物と空間』における空間構成論を簡単に概観することで見出されるいくつかの問題点を総括し、本論考の結論を導き出すことにしよう。

結び

われわれが第一章で確認した本論考の二つのポイントとは、空間構成と幾何学空間の構成が重なり合っていると思われること、およびキネステーズ概念の導入ということであった。上で見てきたように『事物と空間』においてフツサルは、キネステーズを身体部位に応じて段階的に考えていた。こうした考察様式は、超越的な身体を前提として初めて可能になるはずである。純粹現象としてのキネステーズは身体構成に先立って与えられるからである。さらに各領野の段階性にも疑問が生じるだろう。そもそも特定の身体部位だけを動かし、他の部位は固定しているというケースはきわめて特殊なものであつて、キネステーズの発動は一般に部位に限定された形で起こることはほとんどない。⁽¹²⁾ それゆえフツサルは場所の全体的拡がり⁽¹³⁾とキネステーズ一般の統一秩序が成立するとしたはずである。したがつて、身体部位を積み重ねることによつて、こうした全体的統一秩序が語られるのだろうか。また仮にこの点を譲歩しても、こういった考察様式を採用することは、フツサルがキネステーズ概念に追わせようとしたダイナミックな地平指示機能を割り引いてしまふという困難に陥るように思われる。一九一〇年代以降の考察を見るに、地平指示機能は「わたしはできる」という能力体系に求められていた。しかしわれわれが今確認したように『事物と空間』では、キネステーズ的体系は、像経過の連続的多様体として捉えられる。そして空間の成立は一次元と二次元の二つの多様体の結合によつてもたらされるとされていた。これは地平指示機能を、多様体がうちに含む形式的完結性によつて代替していることにはならないだろうか。言い換えれば、多様体は形式的な体系であるがゆえに、可變的に内実を受け取ることができるのであり、その可變性が地平指示機能を担うものとなつていくことである。こうした解釈が成り立つ根拠は、フツサルがキネステーズ的経過によつて体験される像経過の連続によつて主観が対面する空間事

物の構成を語っているように見えて、その背後に幾何学空間の構成を重ね合わせていたと考えられるからである。それは先に挙げたように、頭部運動領野がリーマン空間とただちに同一視されていることから、推察される。フッサールは空間表象の起源を幾何学上の概念にもとづく数学的演繹によって説明することが不可能だと考えて、心理学主義を採用し、後にはその立場を自己批判して、現象学を提唱したはずであった。しかし『事物と空間』にあつては、キネステーズ概念を能力体系として捉えるまでに至っていないがゆえに、幾何学の形式的一般化の理論としての多様体論を支えにしているように思われる。『事物と空間』は、空間構成論と多様体論にもとづく空間の構築論とが混在しているものであり、その意味で不十分なものになっているのである。空間の構成論が語られるのは、物質的事物の構成を経て身体主観のキネステーズ的自由が明確になる『イデーニⅡ』においてなのである。

以上、『事物と空間』の空間構成が不十分なものであることの意味を明らかにしてきたが、本論の結論は、一八九〇年代のフッサールが採っていた心理学主義と『事物と空間』での思想のより詳細な比較考察を必要とするものである。また今回は、『事物と空間』の不十分な側面にのみ焦点を当ててきたが、もちろんフッサールの思索全体にとって積極的な意義も多く盛り込まれた著作であることは疑いえない。能力体系として把握されてはいないものの、本来的現出と非本来的現出のダイナミズムをキネステーズ概念によって捉えようとする試みは、後にフッサールによって地平の現象学として深められることになる萌芽を形成している。さらに、領野における視覚像の純粹記述は、感覚与件に関する受動的総合の分析に多くの点で重なりあうものがある。そうした点を考察することは、フッサールが現象学を静態的分析から発生的分析へと深化させてことに対しての内的動因を解明することへ通じると思われる。こうしたさらなる課題を明示したことで、今回の考察を終えることとしたい。

註

フッサール全集(Husserliana)からの引用や参照頁は、慣例にしたがい、巻数をローマ数字で、またページ数をアラビア数字で示して、本文中に直接挿入した。引用した書名は以下の通りである。

- Bd.III: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reinen Phänomenologie*, hrsg. von K.Schuhmann, 1976. (渡辺二郎訳『イデー・ン・I』みすず書房、一九七九年、一九八四年)
- Bd.IV: *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Zweites Buch: Phänomenologische Untersuchungen zur Konstitution*, hrsg. von M.Biemel, 1952. (立松弘孝、別所良美訳『イデー・ン・II』みすず書房、二〇〇一年)
- Bd.VI: *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie. Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie*, hrsg. von W.Biemel, 1954. (細谷常夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社、一九七四年)
- Bd.XVI: *Ding und Raum. Vorlesungen 1907*, hrsg. von U.Clasges, 1973.
- Bd.XIX-1: *Logische Untersuchungen. Zweiter Band: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis. Erster Teil*, hrsg. von U.Panzer, 1984. (立松弘孝訳『論理学研究』二、三、みすず書房、一九七〇年、一九七四年)
- Bd.XXI: *Studien zur Arithmetik und Geometrie. Text aus dem Nachlass(1886-1901)*, hrsg. von I.Strohmeier, 1983.

(一) フッサール全集第二巻『現象学の理念』に独立して収められているこの講義の序章部分は、純粹現象学のための序文という性格をもち、「現象学的還元」という方法の固有性を論じている。したがって『事物と空間』の分析は、現象学的還元が遂行された後の事物構成論という性格を有している。またこのテキストにおいて、フッサール現象学が「身体の現象学」へと発展していく際の最重要概念の一つである「キネステーズ」Kinästhesieが導入されたということも、注目に値するだろう。またカント哲学の集中的な研究によって、フッサールは超越論的問題設定を取ることになったと一般に語られているが、『事物と空間』ではフッサールはカント批判を展開している。

(二) Rudolf Bernet, Iso Kern, Eduard Marbach, Edmund Husserl, *Darstellung seines Denkens*, Felix Meiner Verlag, 1989, S.129. 十

田・鈴木・徳永訳、『フッサールの思想』哲書房一九九四年、二〇〇頁。

(3) テキスト全体にわたる議論は、筆者が現在準備中である『事物と空間』の翻訳（ちくま学芸文庫より、吉川孝氏（慶應義塾大学）との共訳で二〇〇七年刊行予定）における解説に、機会を譲ることにしたい。

(4) 現象学的還元という現象学的方法の生成に関しては、さまざまな先行研究が存在している。一九〇五年夏ゼーフェルト滞在中に、フッサールがミュンヘン現象学派のプフェンダー、ダウベルトと知覚の問題に関して討議するなかで、現象学的還元が初めて語られたというのが共通理解となっている。Vgl. Karl Schuhmann, *Husserl über Pfänder*, *Phaenomenologica* 56, Martinus Nijhoff, 1973, S.163ff.

(5) これについてはフッサール全集二十一巻に収録されている「空間についての哲学的試み（1886-1901）」（XXI, 262-310）に詳しいが、今回はこれ以上詳しく触れることはできない。

(6) Vgl. Günther Neumann, *Die phänomenologische Frage nach dem Ursprung der mathematisch-naturwissenschaftlichen Raumfassung bei Husserl und Heidegger*. (Philosophische Schriften, PHS 32), Duncker & Humblot GmbH, 1999, S.157

(7) 実際のところ、純粹現象という枠内にとどまらず記述するというのは、きわめて困難な作業と思われる。厳密に言えば、「頭を左右に動かすことで首の辺りに感じる引つ張られたり、縮んだりするような感覚」といった語り方も、許されないことだからである。第三章で見ると、フッサールの記述がきわめて理解しにくいものとなっているのも、これが原因の一つであろう。

(8) Bernet, Kern, Marbach, a.a.O, S.124（邦訳、一九三頁）

(9) ちなみにフッサールは眼球運動や上半身の姿勢などを現象学的に還元された意味で理解している（そのほとんどは引用符つきで表記している）。にもかかわらず、現象学的な個別分析は自然科学の対応する研究を、特に感覚生理学を模範として行われている。

Vgl. Günter Neuman, a.a.O, S.157

(10) リーマン幾何学は、球面上の幾何学を一般化したものであり、一般相対性理論に応用された。なるほどフッサールに好意的に、このテキストを読むことは可能だろう。身体の可動部を眼から頭部へと拡張することによって、与えられる視覚像の領野範囲も拡がる。首の筋肉を動かすことによって頭部が扇状に動くので、視覚領野が球面的にゆがむ。それゆえリーマン幾何学によって問題とされる空間と類似した空間が与えられるという解釈である。しかしこのようなフッサールの記述は、すでに現象学的な領域を越え出た、外的なものである。こうした表記をフッサールに選ばせたのは構成される空間と幾何学空間を重ね合わせようと

する動機であつたと考えることに、それほど無理はないだろう。

(11) 「空間の三次元性は経験の質料と一緒にすでに与えられているわけではなく、感覚内容から産出された一つの表象である。しかし同時に、フッサールによれば、その表象の産出は、幾何学上の諸概念に基づいた純粹に数学的な構築によってだけでは説明することができない」丸山徳次「空間と身体」『フッサールを学ぶ人のために』世界思想社、二〇〇〇年、一一八頁。

(12) この点に関して、一九一六年に書かれたと思われる草稿では改めている。「わたしが眼を左上へ動かそうと、眼の位置を固定して頭を左上へ動かそうと、このことは同じことを行っているのである。——中略——完結した一つの視覚空間を構成するすべての体系は、共属している」(XVI 315)。

〔付記〕

本論文は、平成十七年度關西大学哲学学会秋季大会（平成十七年十一月二十六日關西大学図書館ホール）にて行った口頭発表を加筆修正したものである。

本研究（又は本研究の一部）は、平成十七年度關西大学研修員研修費によって行った。